柳沢の空襲体験

吉祥寺東町　服部　次子

中島飛行機武蔵製作所の近くに、下請けの朝比奈鐵工所というのがありました。そこに父が勤めていたのですが、その辺も一緒に爆撃されました。

中島には谷戸に田無試運転工場というのがあり、そこまで単線で、大急ぎで、慌ててつくったような線路が本工場から通っていました。私の実家は、角を切られてすぐ近くを列車が行き来していました。中島に爆弾が落ちたときに、その輸送線路が狙われて、兵隊さんが亡くなったりして、辛い思いをしました。それはとてもひどい空襲でした。

ちょうど今の青梅街道の上に西武線の線路のガードがあります。私の実家は、そのガードから百メートルぐらい保谷寄りです。四月の何日か忘れましたが、時限爆弾が落ちたことがありました。最初、それが時限爆弾ということがわかりませんでした。寝て間もなくのことでしたが、照明弾の光とともに、「チャチャッ。チャチャッ。」という音がするのですが、一体、何の音かそのときはわかりません。まるで、けやきの葉っぱをササッと揺するような物音でした。父が「何だろう。今までにない爆撃が来るのだろうか。」と言いました。すると、一軒置いて向こう側の方が、「おじちゃん、来て。」と飛んでやってきたのです。その方の家には、井戸があったのですが、井戸の脇にこんもりと、土が盛り上がっていると言うのです。もぐらの大きい塚のように土が盛り上がっているのだが、何なのかわからない。そこで、父は飛んで行きました。戻ってくると、「穴はないけれども、何だかわからない。爆弾が不発なのかもしれない。」と言いました。

すると翌朝に、ものすごい音で爆弾が破裂して、お隣の井戸が吹き飛んでしまったのです。結局、それは時限爆弾であったのです。空襲解除になってから、二、三時間後に破裂するものでした。

隣に住む方は、空襲が怖いということで、他の方の家にある大きい防空壕に避難していました。すると、その避難した防空壕に一トン爆弾が落ちてしまい、亡くなってしまったのでした。その中には九人ぐらい入っていたそうです。そのうち四人は助かったけれども、あとの五人は奥のほうにいたそうで助かりませんでした。父が助けにいったときには、防空壕の形が変わっていました。防空壕の向きまで変わってしまったのです。防空壕といってもただ掘って、あとゴザを周りにかぶせて、竹の棒で留めてあるくらいの壕でした。うちの防空壕も軽く埋まってしまい、父が下か

ら戸を手で持ち上げたら、戸が開き、それでようやく私たちは出てこられました。

外に出てみると、お隣のトイレの落しがめが吹き飛んでいて、割れてはいなかったのですが、中は全く何にもなくなっていて、私たちの防空壕の上にすぽっとかぶさっていたのです。その向こう側が、運送会社の車庫だったのですが、トラックがその向こう側の床屋の屋根に乗っていました。青梅街道は割れて、盛り上がっていました。一トン爆弾の穴があいていましたが、怖くて誰もこれを越えられませんでした。私の母が、気丈な人間でして、「私が越えて向こうまで行って様子を見てくる。」と言い行きました。向こう側の方は、家はかなりやられていましたが、亡くなっている方はいませんでしたが、怖い経験をしました。

近所では、その体験を書き残すような方が誰もいなかったから、記録のようなものが全く残っていません。田無駅の空襲のことは皆さんよく知っていますが、私たちの柳沢の時限爆弾の被害については、ほとんど残っていないようです。

東京大空襲のときは、所沢街道を所沢に向かって、近所の方と一緒に逃げました。今の前沢になりますが、当時は竹下という場所でした。農家の方が炊き出しをしてくださって、お芋やおにぎりをいただきました。「所沢がやられているから、引き返したほうがいい。」と言うので、また燃えている空を見ながら、自分の家のほうに戻りました。

学校にいるとき、警戒警報が鳴って、保谷のお友達と二人で飛び出して、都立家政から西武線に乗りました。そこで、ちょうど一年先輩のカトウさんという、田無駅のすぐ前の土建屋の娘さんに会いました。彼女は優秀な方で、いつもいろいろな話をしてくださるので、電車で一緒になるのが楽しみだったのです。そのときも警戒警報が出ているのに、彼女がいろいろしゃべるのです。それを聞いているうちに、「田無に、父が三十人入りの防空壕を作り、それが鉄筋で出来ていてすごいのよ。」と言うので、お友達と二人でその方の防空壕に入れてもらうことにしました。電車は、行っては止まり、行っては止まりでようやく柳沢に着いたわけです。ところが話が弾んで、気づいたら、カトウさんを残し、二人でホームに降りてしまったのです。そこで、まごまごしていると、駅員さんに、「もうすぐ敵機が来るから、そんなところにいたら危ない。」と言われて、引きずり下ろされるようにホームから降りたのです。カトウさんは、電車の中でどうしたのという顔をしていましたが、手を振って別れました。

家に戻ると、もう近所の人も全員逃げてしまい、辺りには誰もいません。皆のいるところに逃げなければいけない

と思い、「田無神社ではないか。」と向かうと、近所の方が皆いました。そのときはものすごい空襲でしたが、神社の縁の下にいた人は皆助かりました。空襲が終わり、ようやく家に戻ると、お友達が飛んできて、「カトウさんが亡くなってしまった。」と言うのです。あのとき私と友達は、何ということなく柳沢で降りてしまったから助かったわけですが、なぜ駅に降り立ったのか、二人とも全く分からないのです。

柳沢に、大きな爆弾が落ちたことを覚えています。ちょうどガスタンクの北側だったと思います。あのときは大騒ぎになりました。近所の大人たちが皆、わけのわからない爆弾が落ちて、途中で電線か何かに引っかかって、破裂しなかったと言っていました。ところが、完全に爆発しないで、何か、ちりちり飛んだらしく、怪我をされた方もいて、体中ガラスで刺されたような感じだったような気がします。もしも、あれが引っかからないで、まともに破裂したら、私たちは命がなかったと父が言っておりました。

終戦のちょっと前のことですが、近所に自転車屋さんがあり、そこの息子さんが、特攻隊のようだという話を父から聞きました。終戦から一カ月位前だったと思いますが、夜、田んぼで男の方のすすり泣きが聞こえるのです。私が玄関のところへ出たら、父が「行くんじゃない。」と言うので、慌てて引っ込みました。彼は、お母さんに別れを言いに来たらしいのです。私が見たのは、ただ、たたずんでいる姿でしたけれども、すすり泣いていました。それから何日かして、飛行機で突っ込んだということを聞きました。若者の男性のすすり泣きの声というのは、今も頭から離れません。あの兵隊さんはかわいそうでしたね。

終戦の日、父は泣いていましたけれども、私どもは戦争が終わったというので嬉しかったです。でも姉は震えていて、防空壕から出ないのです。まだ敵機が来ていると言うのです。十九日頃まで本当に来ていたようです。

戦争が終わっても、戦後の怖さがありました。青梅街道を輸送のアメリカの車が往来していたのですが、若い女性が通ると、アメリカの軍人が追いかけてきたのです。

私たちの家は、青梅街道からちょっと入ったところにあったのですが、アメリカの軍人が女性を追いかけて来たのです。その事件があってから半年ぐらいは、午後四時を過ぎると、母親たちは娘を青梅街道へ出さないように隠しました。また、ガードの下で追いかけられて、親子で亡くなった事件もありました。アメリカの支配だから、言ってはいけないと思って、みんな黙っていましたが、結構そういう怖いことがありました。

※ご本人からの聞き取りにより作成しました。